

令和3年度

板橋区総合教育会議

令和3年9月2日

板橋区 総務課

令和3年度板橋区総合教育会議

日 時 令和3年9月2日(木)
開 会 午前10時30分
閉 会 午後0時20分
場 所 板橋区役所南館6階 教育支援センター

出席者

区 長	坂本 健
教育長	中川 修一
教育長職務代理者	高野 佐紀子
教 育 委 員	青木 義男
教 育 委 員	松澤 智昭
教 育 委 員	長沼 豊

出席した事務局職員

政策経営部長	有馬 潤
政策企画課長	吉田 有
総務部長	尾科 善彦
総務課長	篠田 聡
区民文化部長	森 弘
地域振興課長	町田 江津子
健康生きがい部長	五十嵐 登
健康推進課長	荒井 和子
資源環境部長	久保田 義幸
教育委員会事務局次長	水野 博史
地域教育力担当部長	湯本 隆
教育総務課長	近藤 直樹
学務課長	星野 邦彦
指導室長	氣田 眞由美
新しい学校づくり課長	渡辺 五樹
学校配置調整担当課長	久保田 智恵子
教育委員会事務局副参事	千葉 亨二
生涯学習課長	家田 彩子
地域教育力推進課長	諸橋 達昭
教育支援センター所長	阿部 雄司
中央図書館長	大橋 薫

議 題 等

- 1 開 会
- 2 区長挨拶
- 3 議 題

人生を豊かに生きるための生涯を通じた学びのあり方について

—可能性とチャンスを広げる学習の場と機会の提供に向けて—

(1) プレゼンテーション

「区民の学び支援としての社会教育の意義や現状と課題等」

(2) 協議

- 4 閉 会

○坂本区長

それでは、時間がまいりましたので、これから令和3年度板橋区総合教育会議を開催させていただきます。今日は大変お忙しいところ、ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。ただいまから令和3年度板橋区総合教育会議を開会いたします。

中川教育長、また教育委員の皆さんにおかれましては、日頃から板橋区の教育の伸張発展にご尽力を賜り、この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。誠にありがとうございます。

さて、総合教育会議については、地方教育行政の組織及び運営に関する法律によりまして、地方公共団体の長と教育委員会が、教育行政について協議・調整を行い、両者が教育施策の方向性を共有するなど、連携体制の強化を図るために設けられている会議です。教育を行うための諸条件の整備、その他の地域の実情に応じた教育、学術、文化の振興を図るための重点的に講ずべき施策について協議する場でもございます。

本日は議題として、「人生を豊かに生きるための生涯を通じた学びのあり方について」でございますけれども、教育委員の皆さんからは、それぞれのお立場から様々な観点でのご意見を頂戴したいと思います。

協議に入る前に、「区民の学びの支援として社会教育の意義や現状の課題等」について、中央図書館の大橋館長の方から説明をお願いしたいと思っております。よろしく願いいたします。

○大橋館長

皆さんおはようございます。教育委員会事務局中央図書館長の大橋でございます。議題についてご説明させていただきます。パワーポイントの資料を基に説明させていただきます。

本日取り上げます課題でございますが、「区民の学び支援としての社会教育の意義、現状と課題等」について、こちらをタイトルとしまして、教育施策のうち、社会教育施策に焦点を当ててご説明をさせていただきたいと思っております。

今回のプレゼンテーションの目的には3つございます。

第1は、区民の「学び」に係る取組や意義について、理解を深めることです。教育施策全体における社会教育施策の現状、領域といったものについて確認すること、それが1点目でございます。そして第2は、施策の展開に向けた課題の整理です。社会教育施策は、多世代、すべての区民を対象として、社会全体の影響にも大きく左右されるものでございます。そういった中で課題を検証し、まとめたいと思っております。第3は、生涯を通じた「学び」支援の方向性、具体的な取組等について、次期学び支援プラン2025の検討を念頭に話をしてみたいと思っております。

まず、昨今の社会教育施策の周辺環境や、事業の現状からご説明します。

初めに①番にあります、コロナで学ぶ機会が喪失しており、従来の学びの手法を見直す必要が出てきております。特に在宅による学びの需要は高まっていると言えます。次いで②番でございます。区ではナンバーワンプランの重点戦略にSDGs戦略ビジョンなどを加え、新たな「ナンバーワンプラン2025」が策定されております。これらの基本理念と広い対象領域、新しい社会のテーマの展開などを注目しながら、進捗していく必要がございます。また、③番でございます。3月には中央図書館が開館いたしました。図書館のテーマの一つでもございます「絵本のまち」、こちらの発信については、ブランド戦略の施策としても進めるところです。知の拠点、文化の拠点としての発信というのも進めてまいりたいと考えているところです。このような中で、今日的課題をしっかりと捉えて、社会教育について改めて検討していく必要が出てきております。

ここからは現在、展開されている取組を幾つかご紹介させていただきます。最初に、中高生勉強会「学びiプレイス」です。こちらは中高生を対象に、区内5か所で勉強会等を実施している取組でございます。学校、家庭以外での居場所というのを機能として持っているのがこの取組の特徴です。

次へ進みます。次は板橋区コミュニティスクールです。今コロナ禍にある中でも、地域とともにある学校、こちらをテーマにしまして、CSコミュニティスクール委員会、また、学校支援地域本部の会議体等を通じて、深い熟議の元で地域における学校の支えとして定着を図る取組でございます。

続いて、先ほどお話しました3月に開館しました中央図書館の事例でございます。テーマとしては「新しい価値の創造」、また、次世代を中心とした「未来を育む取組」の実践、それから、開かれた「学びの場」としての知の拠点、文化の拠点としての役割を確かに担っていくと、こういったところを取組の柱として展開しておるところでございます。さらに、多様な学び、学習といった視点から、コミュニケーション等にもつながっていく取組をいくつかご紹介いたします。身近なものを使った学習というところでは、写真にあるような、手づくりの作業等を通じて、若者と社会教育指導員、そういった方々との会話のきっかけづくりであるとか、それから展開する学び相談であるとか、自己肯定感の醸成、こういったものも体験を通じた中で展開しております。こちらは、野菜作りを通じた学習という取組でございます。中高生や若者と野菜づくりを行うという機会を通じて、食文化への関心等にも展開を広げていく、そのような文化的な体験を通じた学びの取組がございます。また、こちらはSNS等のトラブルを防止するための講座の開催でございます。今日的な課題にいち早く取り組んだ学びというのを提供する事例であると言えます。このような広い対象に向けて、様々な目的を持って、教育の機会、場をつくり、学びを提供していく、こうした視点で取組が進められております。

さて、個別の取組を見ながら現状を示してまいりましたが、多岐に及んでいる社会教育施策の位置付けをここで共有したいと思います。こちらの図は、文部科学省中央教育審議会の中で示された内容でございます。まず、一番大きな括りとしまして、生涯学習という領域がございます。これは、日常生活での学びも含めた生涯にわたって自主的、自発的に行うことを基本とした学習活動全般を現しております。このうち、茶色で色付けをしている領域、教育者による教育となっておりますが、家庭教育、学校教育、そして社会教育の領域がございます。社会教育は、家庭教育や学校教育以外の広い概念で、それらと相関関係にあると言えます。また、「教育者」についてもですね、常に専門家や資格者ばかりではなくて、地域の人材であるとか、学んだ者も含めた、相互の学び合い、こういった中での多様な教育の形態も含んでございます。さらに、こちらは生涯学習のうちの社会教育の対象領域をライフステージを踏まえて表したものでございます。社会教育の最も大きな特長は、すべての世代を対象とした施策領域であるということです。誕生、またはその前の妊娠出産期に始まりまして、学校教育との関連性、連携協働の時期がありまして、さらに右側に移っていった、成人、シニアまでの多様な対象に、学びたいときにいつでも、学びたい場所をどこでも学びを提供すると、そういった取組のステージがございます。

ここで、社会教育と相関する家庭教育、学校教育との連携、協働について見てみます。

家庭教育の関係性においては、家庭、親、保護者、ここはその自主性を第一義として尊重をしながらも、社会性の育成につなげることを意識した連携や、孤立しがちな保護者等に対する支援的な要素も兼ねた協働の場があります。

次に、学校教育の関係では、学校現場以外、教育課程以外での放課後の生活、あるいは地域と連動した活動への関わりなど、広範囲で様々な人材が関係して展開される連携・協働が見られます。そして、不登校児童、生徒等への支援、誰も取り残さない学びとともに結びつく連携の形もあらうと思います。さらに一番下の幅広い主体との連携においては、多様な対象に対しての社会教育の関わりとして、大学や関係諸団体、施設との連携、また、庁内での各部署との協働も深まっていく場面でございます。

このような社会教育の教育施策としての位置付け、ライフステージにおける関わりを見てまいりましたが、ここで、社会教育そのものの効果や意義、社会教育がめざすところについてまとめまして、課題を見ていきたいと思えます。社会教育の学びがめざすところとしましては、3つの要素があると言えます。第1に人づくりについての学びです。知識、教養を身につけるなど、現代的社会的課題への解決や自己実現など、個人のレベルでの資質や能力の向上をさせる教育活動の一つでございます。第2に関係づくりに基づく学びです。社会教育の教育活動は、学習者、教育者等が関わり合って、その方法や手段などを深めていく、組織的な教育活動に基

づくものです。教える側、教えられる側に限らず、受講者が講師に回るような、学び合いや活動に主体的に参加することで、他者との関わりを作る活動にもつながって参ります。第3に地域づくりに基づく学びです。組織的な教育活動が進化し、地域課題解決のためのボランティア活動など、自主的な活動参加に通じていくものです。これらの過程を通じて、現代的社会的課題の解決をめざしていく学びがここで見られます。

さて、このような社会教育がめざすべき状況に対して、現状どのような課題が見られるのか、取組の内容や運用の実態等を見ながら考えてみたいと思います。まず、個人の資質向上をめざす人づくりの学びについてです。講座や講習会などの学びの機会を見てみると、こちらは教育委員会に限らずですね、区長部局においても、様々な取組が見られるところです。各行政課題に関連し、それぞれの取組は学びの機会ではありますが、教育委員会としてはそれを把握しきれていない状況でもございます。また、内容について、趣味や教養等の講座や講習会に比べて、社会課題や地域課題といったコンテンツが少ないといったところも課題であると言えます。一番下にあります参加者の年代が固定化されており、幅広い年代の参加が得られていないという状況もございます。こちらは先ほどのコンテンツの内容とも関連が強いところであると感じております。

続いて、関係づくりや地域づくりといった学びの手法や発展に関連するところの課題でございます。第1には「教わるだけ」、「学ぶだけ」で終わっているといったところです。学び合いの環境という発展的なところが整っていないところが課題として見られると思われまます。第2にはこれをコーディネートしていく、他者を巻き込んでいく学習、そのステージ、そのスキルを持った人材が不足しているということがございます。正確にはそのような方が参加していないところが課題になると言えます。第3には関係づくり、地域づくりのステージとなる場や機会、すなわち社会的・心理的な「居場所」や多様な発信ツールを活用できていないところも課題であると言えます。こうした問題点を解決するため、今年度、「学び支援プラン2025」の策定を進めておるところでございます。

「学び支援プラン2025」は、3つの視点と、4つの柱から「教育の板橋」の実現をめざしております。まず教育課題を解決する3つの視点についてご覧ください。これは、学び支援プランにおいて、重点的に取り組む項目と位置付けられております。DX（デジタルトランスフォーメーション）では、GIGAスクール構想など、ICT技術を児童生徒にあまねく導入しております。次世代人材を育成する教育活動の定着を図るためでございます。さらに、ESD（エデュケーション フォア サステイナブル ディベロップメント）の推進においては、SDGsと高い関連性のある、持続可能な社会の創造をめざす学習活動でございます。そして、第3でございます。学びの循環の推進、これが学びの成果をさらに人のために活用する、次の

世代の交流やつながりを深める取組、地域を活性化する取組につながる教育活動でございます。最後のこの学びの循環の視点につきましては、社会教育の組織的な教育活動、学び合いといったところでは、キーワードとなると言えます。

次に社会を生き抜くために必要な資質能力の育成に向けた4つの柱についてです。4つ並んでおりますが、この中で第4にあります「誰一人取り残さない居場所づくり」といったところの柱を加えておるところでございます。これは、すべての世代への学び、いつでもどこでも参加できる学びの場と機会の提供を明確にする柱でございます。これまでは上の3つの柱、学校教育が中心だったところに加える形で、この居場所づくりといったものを社会教育の充実という意味で表すものです。この柱を軸として、組織的な教育活動を通じた人づくり、関係づくり、地域づくりにつなげていくものです。「学び支援プラン2025」の課題解決の方向性を、社会教育の意義、「人づくり、関係づくり、地域づくり」の視点から、具体的な取組の方向性を踏まえて検討してまいります。第1に人づくりにおいては、学びの充実、コンテンツの充実という課題を踏まえて、区長部局の講習や講座も含めた様々な活動を社会教育の視点で捉えての情報の集約などを図り、教育委員会がハブ機能となって機能していくような検討をしたいと考えております。第2に関係づくりにおいては、コーディネート人材の発掘や育成、また参加型の取組も検討してまいりたいと考えております。例えば図書館で主催する事業に、自ら調べ考えて、学び合う参加型の形式を取り入れることや、学んだことを発信する場、発表する取組を取り入れて参りたいと考えております。そして第3に地域づくりにおいては、すべての世代に、いつでもどこでも教育活動を行えるステージとなる場、きっかけ、機会そういった社会的・心理的な居場所を、社会教育施設を中心に活用して参ります。

「学び支援プラン2025」の検討では、組織的な教育活動を、全区的または全庁的な展開を踏まえて、社会教育の充実を踏まえて、諸課題を解決してまいりたいと考えております。学び支援プランの検討の方向性を踏まえて、教育施策における社会教育をまとめてみたいと思います。

学び支援プランにより、めざす人間像というのがございます。自立・貢献・共生・創造の4つの視点でございます。これらは皆、教育や自己学習を継続し、実現されていくものです。これまで、教育分野の施策領域は、学校教育や家庭教育に視点が注がれており、社会教育は補完的な位置付けが強かった面もあろうかと思えます。しかしながら、社会教育の機能はすべての世代に向けて、この4つの人間像をめざすところでもございまして、広い対象により多様な関わり方によって発展し、進歩していくものと言えます。「ナンバーワンプラン2025」の重点戦略との関係についても、社会教育が広い領域をテーマとして、また、あらゆる世代を対象としているところから、SDGs、DX、ブランド戦略のいずれにおいても親和性が高いもの

と思われま。区長部局と連携、協力においても、社会教育施策はより緊密に取り組むことができ、戦略の推進に資するものと考えております。

今回、この総合教育会議において、社会教育を再評価、再認識することによって、今後の施策展開が充実することを願っております。

説明は以上でございます。ご審議の程、よろしく願いいたします。

○坂本区長

ありがとうございました。

ただいまの説明につきまして、ご質問がございましたらどうぞお願いいたします。

ご質問がないようでございますので、どうもありがとうございました。ご苦労様でした。

それでは、本日のテーマでございます、「人生を豊かに生きるための生涯を通じた学びのあり方」についての協議に入ります。最初にこのテーマについて、恐縮ではありますが、私のほうから意見を述べたいと思いますので、よろしく願いいたします。

昨年の9月、文部科学省が「第10期中央教育審議会 生涯学習分科会における議論の整理」に関する資料を公表いたしました。この資料には「多様な主体の協働とICTの活用で、つながる生涯学習・社会教育」というサブタイトルが付されております。人生100年時代と超スマート社会、Society5.0の到来を背景として、社会の変化や課題を踏まえた新しい時代の生涯学習や、学校教育の領域を除いた組織的な教育活動を対象とする社会教育は、どのようなあり方や姿となることが考えられるのかということが問われております。板橋区としましても、区民の主体的な参加を得て、多様な主体の連携・協働と、幅広い人材の支援により行われております「開かれ、つながる社会教育」を広めていく上において、地域や社会の課題解決に向けた取組を行う民間団体や、人材の活躍、連携をどのように促進していくことが考えられるのか、また、関係機関や行政の果たす役割にはどのようなものがあるのかについてを議論し、方向性を見出していく必要があるものと考えております。

本区では、現在、教育委員会以外での区民の皆さんが主体となった学びに関する事業をピックアップしますと、まず環境分野においては、「板橋エコ未来塾」、「環境観察」、「環境講座」など。健康づくり分野においては、「I(あい)サロン」、「フレイルチェック測定会」、「女性健康セミナー」などがございます。また、介護予防関係においては、「10の筋トレ体験講座」、「認知症プログラム-能力アップ教室」など、また防災関係では、「東京マイ・タイムライン講座」、「防災スマホ教室」、「防災リーダー養成講座」など。福祉関係においては、「手話講習会」、「発達障がいセミナー」、「失語症区民講座」等がございます。また、スポーツ関係においては、「板橋区スポーツセミナー」、「障がい児・者水泳教室」など。シニア世代向けでは、「かくしゃく講座」、「板橋グリーンカレッジ」などがございます。この

ほか、各種のボランティア養成講座、ボランティア活動の体験講座、NPO応援講座等を実施しております。

これらの事業も、生涯学習、社会教育という括りの中において、関係の所管部署全てが相互に連携・協働して、区民が事業へアクセスしやすい仕組みづくりや、ICT技術を活用した学習環境の整備、多様で重層的な学習ステージの提供を進め、区民の学習活動を支援し、促進していくことが求められていると考えています。

そしてまた、学習の成果が実践に活かされ、地域における活動主体、リーダーとなる人材が生まれ、地域課題の解決につながるような好循環が形成されることが望まれています。

さて、先ほどプレゼンテーション、大橋館長の方からありましたけれども、その中で、新中央図書館の紹介がありましたが、本にまつわる話を、私の見た話なんですけれども、少し話をしていきたいと思います。

まず、本は身近にあるものとして、知識を得るための必要なツールではありますが、私はそれ以上の価値もある、というふうに考えています。本から何につながるかといった観点から、少しお話をさせていただきます。

東武東上線ときわ台駅の北口の近くの商業ビルなんですけれども、ちょうどときわ台駅の北口を降り、ロータリーから北、11時の方向に向かっていくところなんですけれども、そこに立つてすぐのところ、2階に小さな本屋さんがございます。

1階の入口のドアを開け、本当にドアだけで、小さい家形の看板があるだけなんですけど、綺麗な木製のドアで、それが1枚、象徴的にある。そのドアを開けますと、少し曲がった階段を登って、エレベーターはございません。2階はアンティークな感じですよ。新しいテナントではあるんですけども、全体としてはアンティークな家具をあえて集めてきてまして、古い木製の本棚が並んで、アンティークな家具がいろいろと置かれております。そういった少しノスタルジックな、昭和の時代を感じるような、落ちついた雰囲気のところでございます。もしかしたら学生時代に行った喫茶店など、今、もう一回行く雰囲気ですかね。そういうような雰囲気なのなんですけれども、左手の一角に、中央図書館がオープンした後に夏休みにかけまして、1、2週間でありましたけれども絵本のまちをつくるためのプロジェクトとして、その周りの店舗に絵本を置いてもらうということ、飲食店にもお願いをしまして、または古い洋品店の空き店舗などにおいてもらう、そういうことをしました。その中に、絵本コーナーを設けていただきました。

窓側には喫茶スペースがございまして、本を読めるんですけど、真ん中に厨房がございまして、コーヒーや軽食等、種類は少ないけれども、食べやすい料理がオーダーできるというふうになっております。中にはロフトのような中2階もございまして、狭いところが好きな人は隠

れ家的なところ、なんとなく自分の落ち着く空間を求めたい人には、非常にこの落ち着くような空間。店内は一つの空間で調和が取れておりまして、静かで、時間が止まっているような、そういう感覚を覚えるような空間です。

並んでいる本は、スペースはそんな大きくないけれど、全部新刊本でございまして、その本の数々を店内のブースから見ると、店主の方の非常に志向が高い。店主の方の人生観というか、店主の方の得意分野を感じます。並んでいる本が全体にマッチするというような、そういう、その店主の方向性をうかがえておりまして、非常にコンセプトが明確な店舗になっています。

まさしく自ら学んできた、体験をしてきた、店主のこれまでの人生が並んでいるような表現が感じられ、生き方を感じました。小さいですけども非常にまとまって、そこに来れば自分の欲しいものがそろそろ、そういう感じがするような空間でございまして。このような面白い、関心を引くような場所については、人がやはり訪れる動機がありまして、たくさん何でも並んでいるだけでは、もしかしたら来ないかもしれません。したがって、共感する人が集まり、店主は学びをいわば仕事、商売に活かしている。自分の学んだことを、経験したことを仕事や商売に活かしていることが分かります。

図書館というものは、特に公立では経済活動には結びつけられない面があるかと思いますが、公共サービスの限界というところもございまして、こうした事例については、まあ全体としては「絵本のまち板橋」に向けた取組として、小さいですけども、そういうものを点から線につながってくるような、そういう取組になって行くのではないかと思った次第でございまして。

地域が実践する生活の中で、仕事の中で、いろいろと試みをしていくことが、やがては大きな成果になっていく。そして、その姿というものが、周りの人に刺激を与えて、特に子ども達が見て感じるということで、将来に対する好循環であったり、或いは将来に対する一つの何かきっかけみたいなものが生まれてくるということが非常に期待できるというように感じました。

次に「学びの広がり」についても、少しお話を申し上げたいと思いますけれども、人は自分の知らないことに関心を持つものです。同じいわば断面で探求しただけではなくて、多面的な関わりを持つことによって、一つのテーマというものが多様なテーマとして広がっていくものであります。

種で言うとその原種、もともとある原種から、新しい品種がどんどん広がっていく、というような新しい価値の創造にもつながる可能性が含まれています。また、学びを通して人と人とのつながりができれば、違う価値観との出会い、また新しい発見があり、一方においては経験が伝承される貴重な機会にもつながってまいります。そして、プロとかアマというような、そういった概念ではなく、そういった区別を抜きにして、市民としての取組が学びの起点となり、

スタートとなって始まる。地域の課題が縦割の分野を乗り越えて、横串をうまく引くことによって、横断された総合的な解決、総合的なこの気づきによる学びになってくるのではないかと思います。

区の事業では、例えばエコポリスセンターについては、産業やコミュニティの活性化につながる学びであったり、災害対策に役立つ情報など、幾つかの分野を横断するコンテンツを提供することができる可能性があると思います。また、高齢者に非常に人気のある大学であります「板橋グリーンカレッジ」については、シニア世代だけではなく、対象を多世代に広げて、学びの循環というものをもっと活かせるような、学んだものを今度は誰かに教え合う、そういう関係づくりが、これまで以上に総合的な学習ができるようなカリキュラムを編成して、区民のトータルな学びの場となることもめざせるのではないかと思います。

私は、このような従来の枠を超えた学びの展開ができる仕組みがあると良いといつも考えております。区が面白さ、また良さをPRしながら、誰もが参加できるような、誰でも入れるような入口を設けること、学びのプラットフォームを作り、様々な学びへ誘導していく。その後の自主的な活動へとつなげていく。また、区が耕した土地に、区民の皆さんの学びという種がまかれて、その種が芽を吹いて、そして育っていき、また色とりどりの花や実をつけていくような、そういう大きな広がりがあるようなフィールド、豊かな森みたいなものができていくのではないかと思います。そのようなイメージというものを持った次第でございます。まさに、板橋区の「学びの森」についてを創造するという思いで、教育委員会を含め、区の各部門が一体となった取組を進めていきたいと思った次第でございます。以上、私から感想を含めて意見を申し述べさせていただきます。

これからは、教育委員の皆様から順次ご意見を頂戴したいと存じます。まずは、高野委員さん、お願いいたします。

○高野委員

今回のテーマは「生涯を通じた学びのあり方」ということですが、私が板橋区に住むようになって初めて受講したのが、母親学級でした。まだ板橋に引っ越してきて、周りに知っている方もいなくてとても不安な時期だったのですが、この母親学級の講座に参加して、知識という面でも不安な気持ちが解消されましたが、さらに新しい友達ができ、また地域とのつながりができました。その後、子育て講座や朗読講座、PTAでの家庭教育学級など、様々な講座を受講しましたが、いずれの講座でも知識を得るだけでなく、地域のつながりが少しずつ深まっていったという印象です。

また、青少年委員として地域の子どもたちとの体験活動を通して、子どもたちが家庭や学校ではできない貴重な経験をすることができたのではないかとこのように思っています。

小学生の頃から、地域での活動を継続していたジュニアリーダーの中には、老人施設を訪問したことがきっかけとなって福祉関係の大学に進学をしたり、レクリエーションでみんなを楽しませることが得意なので、それを活かせる職業に就くために、旅行関係の専門学校へ。また、小さい子どもと交流することが大好きだから保育士になりたいなど、高校卒業後の進路を考える際に、地域での体験活動がたいへん役に立っていました。

また、先ほど大橋館長のプレゼンの中で、区民を対象とした講座や講習会がたくさんあり、教育委員会でも把握しきれていないので、区民が参加しにくいのではという課題が指摘されていました。区長のお話の中でも、教育委員会以外でも、環境、健康づくり、防災、福祉、スポーツ、シニア向け、ボランティア向けなど、教育委員会以外にたくさんの講座があることが紹介されていました。教育委員会の中でも、まなぼーとや教育科学館、図書館など様々な講座がたくさん開催されていて、全体を把握することは難しくなっています。多くの方は、広報いたばしやホームページの募集を通して参加を申し込みをされていると思いますが、それぞれの部署が相互に連携しあって情報を一元化することが大切だと思います。

また、それぞれの方のニーズに合った講座を紹介してくれるコーディネーターのような存在があれば、目的に合った学習の機会が広がっていくのではないかと思います。参加者の年代が固定化されていて、幅広い年代の参加が得られていないという課題がありました。私が実際に参加した講座の中で、大学公開講座では、開催時間を土曜の午後や平日の夕方、お勤め帰りの方も参加できる時間に設定することで、若い年代の方も受講をされていました。また、かなざわ講座では、テーマの設定を工夫して、伝統の料理やお菓子を取り上げた際には料亭の料理長を講師としてお迎えをしたり、また、保育サービスを設けることで子育て中の方も参加できるようになりました。どちらの講座もパソコン文字通訳があり、講座の内容を進行と同時に画面で見ることができ、大変喜ばれていました。テーマや講師、開催時間、開催場所、保育サービスなど、参加者のニーズを把握して、反映させていく仕組みを作ることで様々な年代の方が参加できる、魅力的な講座にしていくことが大切だと思います。

また、関係づくり、地域づくりの課題として、教わるだけ、学ぶだけで終わっているのではという点が挙げられていましたが、大原、成増のまなぼーとでは、学習した成果を分かち合い広く共有する場として、サークルが公開講座や体験教室を開いたり、サークルフェスティバルなどで学習成果を発表したり、サークルやグループが交流して一緒に事業を行うことで、主体的な学びの循環が行われています。身近な地域センターでも、センター祭りや作品展という発表の場がありますが、それを学びの循環に活かしていくことができないかと考えています。作品展では書道や手芸や絵画など、様々な作品が展示されていて、地域には優れた人材がたくさんいらっしゃることに驚かされます。

また一方で、学校やあいキッズからは、授業や放課後に子どもたちに教えてくださる方、お手伝いしてくださる方を依頼されることがあります。こうした人材のコーディネートが身近な地域センターでも可能となれば、地域の中でもまなぼ一のような多世代の交流や学びの循環を実現できるのではないかと思います。

最後に、家庭教育支援という点で、今、教育委員会では、民生・児童委員と学校の協力関係のもとに、家庭教育支援チームの活動が始まっています。その一例として、民生・児童委員の方が定期的にご家庭を訪問し声かけをしたり、登校後に教室に入ることができない生徒・児童がいるときは、別室で一緒に過ごしたり、朝のリズムを身につけて、自力で登校できるように、朝のお迎え、登校支援等をご家庭からの同意の上でサポートを行っています。コロナの影響や様々な事情で、孤立化しがちなご家庭が増えている中、適切な情報を提供し、支援を広めていくためにも、長年にわたり地域の中で活動を続けていらっしゃる民生・児童委員の方々と連携して、情報を共有していくことが重要だというふうに感じています。以上です。

○坂本区長

ありがとうございました。それでは続きまして、青木委員の方からお願いいたします。

○青木委員

はい。それでは私から今回の課題が社会教育ということでございまして、先ほど大橋館長から社会教育、それから板橋で行っている取組、さらには「学び支援プラン2025」に対しての関係性等について詳しいご説明がありました。

私からは、この社会教育というものに対して、実際に必要な学ぶ目的っていうのはどこにあるのかというところを少し、自分なりの考えをお話しさせていただきたいと思います。

先ほど、坂本区長のお話にも出てまいりました、Society5.0というお話があります。

Society5.0の実現に必要な社会変革と言われるような、これはどういったことが真の目的としてあろうかということが一つございます。御存知のように Society4.0、いわゆる情報社会を踏まえて、非常に豊かで便利な社会になったということは言うまでもございません。そこから超スマート社会と言われる Society5.0 というところは、一体何をめざしていくのかということです。

一つのキーワードとして、先ほど大橋館長からもご紹介のあった ESD がございます。ただ、ESD、だけではないと思います。便利で、そして豊かな社会になったということで、社会には様々な課題が出てきたというのも現実でございます。複雑化する社会課題、それから人間や社会の望ましい未来像、解くべき課題、これらの認知設定も必要だというふうに言われるようになりました。そしてさらに、倫理的、法的社会課題というのが、この複雑化した社会の中で非常に増えてきているという現状もございます。

内閣府が令和3年度の科学技術・イノベーション基本計画や、AI戦略2021といったようなところで、これらに対して今後めざしていく社会というものの中に「AI-Readyな社会」というキーワードがございます。この「AI-Ready」というところの、やがて2050年ぐらいに訪れる「シンギュラリティ」、AIが人間を超越するといった社会に対して我々はどの準備をしておくかという意味が込められております。そういったことで内閣府がめざしているところでは、直面する脅威、先の見えない不確実な状況、これは例えば皆様が経験されているコロナ禍、それから昨今の自然災害等を想像していただくと良いかもしれません。これに対して持続可能性、強靱性を備える国民の安全と安心を確保するとともに、一人ひとりが多様な幸せ、well-beingですね、これを実現できる社会の実現ということが一つの目的、次の社会への目的になっているということがあります。

これは「いたばし学び支援プラン2025」の骨子と比較してみますと、例えば持続可能性の学びというのは、先ほどもご紹介のあったESDです。強靱性や安全安心の学びというのは、学びの循環や地域と学び合う教育の中から生まれてくるものと考えます。また、多様な学びと多様な幸せの実現といった中には、GIGAスクールやAI支援といったようなものを含まれているという考え方ができます。これらを踏まえて、この科学技術基本計画の中では、基本理念として挙げられているものが、人間の尊厳が尊重され、多様な背景、すなわち、キーワードで言うとダイバーシティ・インクルーシブといったキーワードです。こういった、人々が多様な幸せを追求できて、持続性（サステナブル）のある社会という基本理念のもと、AIを有効かつ安全に利用できる社会、すなわちAI-Readyの社会への変革を推進していく、ということの内閣府等が目標に掲げているというのがございます。ここで言う、人間の尊厳というのは、単にAIを使って社会経済が効率性や利便性のみを追求した、また、人間がAIに依存しすぎるのではなく、むしろ人間がAIを便利な道具として使いこなすことによって対応能力、創造性を発揮して、やりがいのある仕事、従事できるような社会を実現するという意味が含まれています。対する包摂性とされているものが先ほど言ったダイバーシティ、インクルージョンといったものに代表される言葉です。そして持続可能性。こういったキーワードを、やはり変革が進んでいる今の社会の中で、生涯教育として学んでいくことが重要であり、成人された社会の皆様も、こういった変革の社会で新しく起こっていることを、循環の学びの中で、それに順応し、それを使いこなす。うまく利用していく、というような立ち位置に常にかかわって、あるいは学んでいただきたいというところが、社会教育の中に大きな意味を持つてくるのではないかと思います。

複雑化する社会課題への対応ということで、AI戦略、科学技術イノベーション基本計画の中で挙げられている大きなテーマがあります。この社会課題解決に向けた大きなテーマとして、

「総合的な知」の創出と活用というのが挙げられています。「総合的な知」とは何でしょうかということです。今、我々高等教育へ行くほど専門分野に分かれてしまいます。いわゆる高校あたりの文系、理系に対して、海外、欧米で言われているように例えばSTEM教育のような、人文科学の知、社会科学の知、自然科学の知、これらを融合した「総合的な知」の創出が重要な時代というふうになっているかと思います。AI-Readyの社会こそ、自然の理を身につけた人材の育成が重要だと思っています。自然の理というのは、まさに私達の子どもの頃からの体験・経験を通じて学んでいくような、分かっている当然のようなこと、というような意味合いが含まれています。これはやはり、教科書から直接学ぶというだけではなくて、体験・経験を通じて、感覚的に学ぶといった意味が大きく含まれているかと思うので、やはり経験・体験というのは相変わらず必要なことと思っています。

AIがどんどん社会に進展してくると、コンピューターが導き出した答えがすべて正しいというふうに認識する子どもたちが出てきます。コンピューターが導き出した答えがすべて正しいとは限らないわけで、正しいか正しくないかを、感覚的に体験的に判断できるような知も必要だというふうに感じています。社会教育を通じてすべての年代の人々が、知識と経験に基づいた総合的な知の創出にかかわられる社会の実現が必要です。言い換えるならば、総合的な知の創出には、学びの保障のみならず、地域と学び合う教育や生き抜く力の育成が欠かせないと考えています。そういった意味で、最後になりますが、先ほど大橋館長のプレゼンの中で、図書館を核とした知の拠点という考え方が非常に重要だと思っていますが、これをさらに社会の変革になぞらえて、何度も申し上げて恐縮ですが、教育科学館との連携を充実させていただいて、総合知の創出につなげていただければと考えている次第です。

以上になります。

○坂本区長

どうもありがとうございました。

私、高野委員さんの発言の後、自由な意見交換を本来はしてもらおうと思ったんですが、青木委員にそのまま行ってしまったものですので、すいません、お二方にちょっと戻りますけども、まず、高野委員さんの意見を少し思い出していただいて、ご意見ございましたらと思いますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

高野委員さんの発言に対しまして、ご意見がございましたらよろしくお願いいたします。

青木委員さんの発言に対しまして、ご意見がございましたらよろしくお願いいたします。

○中川教育長

今、どうしても視野がグローバルとか未来という言葉が非常に飛び交っている中で、よく言われるのは、シンクグローバリー・アクトローカリーと言われる、いわゆる足元というところ

の視点が少しおざなりになっているのかなと思うんですが、Society5.0を含めてこれからの板橋区を考えたときに、今、私は思っているのは、やはり経験とか体験というところで、改めてシンクグローバリー、アクトローカリーについてのお考えをお聞かせいただきたいなと思います。

○坂本区長

では、青木委員お願いします。

○青木委員

はい。これは私がというよりは、先ほど、大橋館長の話の中で、やっぱりあったキーワードが非常に重要だと思っています。社会で生き抜くっていう力を、まず個人個人が見つかる上では、当然ですが自分自身が社会人としての人づくり、そして今度は社会という中での、人と人との関係づくりというのが必要です。さらには、何かをやるうとする時に、最近よく言われているのは、個人ではなかなか難しいというのをチームを作ってプロジェクトを遂行するといったようなことは、当然会社があれば、そういうやり方が求められるわけです。

そういった小さい頃からチーム作り、関係づくり、そしてそれを動かすためのいくつかのプロジェクト、中には、例えば町おこしだったり、そういった身近なテーマが存在すると思います。そういったところでは、まさにアクトローカリーですね、地域づくりという先ほどの話もあったと思いますけども、その中で小さい頃から体験していくということが重要だと思いますし、最近私意識しているのに、小学生、場合によっては、就学前の子たちも知財創造ということが非常に重要で、昨今のニュースでも取り上げられたと思うんですけども、小学校3年生の女の子ですね、絵本を作って、それが今ベストセラーになっているようなお話もあったと思います。

そういったような形で子どもの頃から、自分の可能性ですとか、自分の思いというのをいろいろ社会へ発信していくことができる時代になったので、地域づくりも、そういった視点をうまく捉えて、それぞれ個々の子どもたちがいきいきと暮らし、あるいはいきいきと活動しているような、地域づくりというのも一つ重要ではないかなと思います。ちょっと雑駁でした。

○坂本区長

ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。はい。松澤委員さんどうぞ。

○松澤委員

私はですね、青木先生のお話を聞いていまして、2つのところをちょっとお話ししたいなと思いました。

一つはですね、不確定性という問題をお話しされていましたが、今のこれだけいろいろな進化は、テクノロジーの進化が行われる時代ですと一番大切なことが、この不確定性の問題だと

思います。それは、今までやってきたことが正しいのか、それとも、今までやってきたことは正しかったけれども、これからその正しかったことが間違っているのかってということが非常に変化していく。今まで分からなかったことがどんどん分かるようになってくる。正しかったと思っていたことに違った答えが見つかって行く時代になってくると思います。その辺を、行政サービスもそうですが、私たち教育委員会としても教育の分野でも、その変化に微量ながら、ちょっとずつ修正をしていかなければいけないんじゃないかというふうに思っているのが一点。

あともう一つはですね、これは非常に大切だと私は思っているのが、AIがすべて正しいと思っちゃうっていうお話を青木先生がしておられたんですけども、それはですね、機械にも当てはまるんじゃないかと。例えばスマホに書いてある文字がすべて正しい、そう思うことによって、いじめであったり、いろんな問題が起きてしまう。それは青木先生のような最先端でやられている方が言っていることを、もっともっと身近な先生であったり、親だったり、一般の方たちが認識していくということが、機械があっていることは確かに正しいんですけど、それがすべてではないということを、まず認識していくことも大事なんじゃないかなと思っております。以上です。

○坂本区長

ありがとうございました。はい。どうぞ。

○青木委員

おっしゃる通りでございます。やはり重要だと思っているのは、先ほどちょっとキーワードで挙げた、言葉として自然の理という言い方をしましたが、私は昔々の教科書で、教科書検定のときにちょっと見せていただいた、尋常小学校のちょっと教科書っていうのを見た記憶があるんですけども、数学では生きるための数学というような書き方をしてありました。

こういうことが非常に大事で、例えば物を測るのに自分の体を使うとか、そういった物のない時代にどう工夫していたかということが非常に重要で、不確定性の時代の中では、それを乗り切る中で、やはりそういった、困難な局面になったときに、どういうふうにそれを回避していくかというような、レジリエンスとよく言われるような考え方が非常に重要になってくると思います。

そういったところも、この社会教育の中で、改めてだと思うんですけども、そういったことを体験し乗り越えてきた、やはり元気な高齢者の方に、いろいろ体験談を発していただくということも非常に重要なのではないかと思います。そういった人たちが入ったコミュニティを作るということも非常に大事なのかなというふうに感じているところです。個人的な感想になります。

○坂本区長

どうもありがとうございました。ほかにご質問いかがでしょうか。

私から高野委員さんに、先ほど、民生・児童委員さんの学校に対する支援の中でですね、家庭のことで、少し困難がある家庭、そういう方たちを発見して、そしてそのチームを作って、そのチームができる範囲で、学校であったり、或いはその学校に登校する場面であったり、いろんなところでお手伝いをしているということを知ったんですけれども、これは一つの循環する仕組みになってくるといふふうに思っております。これについては、何か、見聞きしている中で、発展というか、学びにつながるような取組になるかとお考えでしょうか、ちょっとお聞きします。

○高野委員

家庭教育支援は、地域の主任児童委員さんを中心とした民生・児童委員さんと学校が、不登校等の問題を共有するように打合せを進めていただいています。すべての学校ではないんですけれども、先ほど挙げた具体的な取組が、このところ開始されています。民生委員さんというのは、私自身もおとしよりに対する見守りをやっていたらという認識が強かったんですが、児童委員として子ども達のためにも、近年力を入れてくださっているということで、地域の協議会を挙げて御協力をいただいているところです。ご家庭からの要望がなければ進んでいきませんので、具体的な例としてはたくさん事例があるというわけではないんですが、こういった支援を行っていく、また地域からの声が聞こえてくるというような、地道な活動を通して今後、今まで救いきれなかったり、声が届かなかったような方たちとのつながりが、学校や教育委員会の中にも届いてくるのではないかと考えています。

○坂本区長

どうもありがとうございます。今後ともどうぞ御支援の程お願いいたします。ほかにご質問いかがでしょうか。

では、次は、松澤委員さんの方からお願いします。

○松澤委員

教育委員をしております松澤と申します。よろしくお願ひいたします。

私は、先ほどまず区長がおっしゃっていた「学びの森」という考え方がとても共感を持って、分かりやすく、私も非常に共感したというふうに思っております。

私の思いや、生き方について今日は少しお話をしていきたいなというふうに思っておりますけれども、私は板橋区内で25年間ぐらい、ガーデニング教室というのを各地域の地域センターで行ってまして、年齢の高い方が多かったんですけれども、そういったことを通じて感じたことについてですが、それは、皆さん、学ぶということと生きがいということが非常につま

がっているといつも感じております。

やはり学んだことを、ガーデニングについてはですね、それが、どうやってやったらうまく育つのだろう、そういうことにつながっていく。それが人は非常に興味を持つのではないかな。例えば学習であったら、学んだことを誰かに教えるということができるようになるということに、すごい人が興味を持つのではないかなというふうに思っております。先ほどの緑の話もあるんですけど、先ほど大橋館長が、中央図書館のお話をされていましたが、学ぶってということと、誰かに教えるってということの、もう一つのところに、私が関わらせていただいて、緑の中で、学ぶって、すごく緑の中の図書館ということが、常盤台エリアの方に何人かお話聞いたときにも、すごくよかったと。反対をされていた方の中にも、環境がよくてすごくいいねというふうに変ったというお話も聞いておりますので、そういったこともつながっているのかなというふうに思います。私だけではなく、学校の先生方は、もっと思っていると思うんですけど、教えるってということは、そんなに難しいことではないんですけど、教えることのできる人を育てるってということ、育てるってことがすごく難しく、私は教育ということは、教えて育てるということだとずっと思ってきたので、そのことをいつも感じています。学ぶということ、学習することってということについてなんですけど、私は3つあると思っていて、必要なことや、そういった仕事のスキルを学ぶってということ、自分にとってもどうしても必要だから学ぶってということ。好きなことややりたいことを学ぶって、これは趣味的なことだと思うんですけど、そういったこと、もう一つはですね、大義や大志、自分が自分というものをなくした上で、何かのために学ぶって、その3つだと思っています。その3つの中でですね、私が先ほど青木先生もおっしゃっていたんですけど、学んだものをどう活かすか。最初に教えていただくって、学び、特に社会教育、生涯学習の面では、教える方に教えることが非常に多くなると思います。良いことに活かすのか、それとも悪いことに活かすのか、それをまず念頭に置いていくのがいいかなと思っております。

自分のことをちょっとお話すると、最初私がそのガーデニングの教室をやる前は、その道をめざすために学んでいたんですけど、私は何のためにお花の勉強するんだろうとか、私は植物の勉強するんだろう、なんで農家をやらなきゃいけないのだろうという悩みの時期があったんですけど、そのときに自分が思っていたのは、自分の生きる意味を探す、自分の生きる意味を学ぶということをいろんな方から教えられたと思っています。その自分の生きる意味を学んだ上で、その中で自分が思ったのは、植物や、時に音楽に助けられて、自分が今やって来られているなというふうに感じました。それで今度はそちらの世界に植物とか音楽って生きている人間でもないんですけど、そこに、私は恩返しをしたいというふうに思いまして、花を通して生きることの素晴らしさを伝えていきたいと感じてその仕事を始めて、たくさんの方に、そ

ういった教える立場ということになってきました。

これからですね、私が今そこに立っていて次に何を思うかという、学びを通して教育委員会という、こういったところに、私が選んでいただきまして、そして、生きることのすばらしさを学びを通して人に伝えられたらいいなと思っています。それが先ほど言っていた「大義」、私の使命と思ってやっているところです。

最後に、植物を育てる者の一人として板橋区の施策の作成に関わらせていただいて、ちょっとおこがましいんですけども、8年前の教育委員会と今の教育委員会を比べてですね、ここまで来たっていう、こんなに進歩したっていうふうに、本当に振り返って感じるがありまして、私が言っていた、今日青木先生と先ほど話していた不確定性の話とか、例えばAIが間違っているとかっていうお話をしていたときに、8年前はですね、皆さんポカーンと聞いていたっていうふうに思っているんですけども、それがですね、今現実にそこに見えてきていて、それを板橋区の行政の方たちがここにいらして、それを本気で、先ほど区長がおっしゃったようにそれを種をまいて育てていこうとしているっていうことが、すごく自分の中では、わくわくしてしまっていて、そして本当に森をつくっていくというふうに、皆さんが思っていただけで、私は農業という目線ですね、こちらの教育委員に参加させていただいて、本当にお手伝いをさせさせていただいていることに誇りを持っていますし、非常に感謝をしております。そして自分が生まれてから多分板橋区で死ぬことになると思うんですけども、そういう場所をよりよい環境にして、多くの実りある木々を育てて、区民の皆さんに分け与えていくことが、私が本当に十数年前に仕事をしたときに、思い描いた光景でそれがゴールだったので、そして地域の皆さんが、最終的にこの板橋に住みたい、と思っただけのようなまちをつくってきたいなというふうに私は思っていたんですけども、それを皆さんと一緒に、こういったまちづくりに参画できることをうれしく思っています。また、私のようにそういったまちを作りたいと思う人たちが増えていくことが、私の目標でもありますので、そのためにこれからも尽力していきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

以上です。

○坂本区長

ありがとうございました。

ただいまの松澤委員さんからの御発言に対しましてご意見のある方、どうぞお願ひいたします。

青木委員、どうぞ、お願ひします。

○青木委員

はい。学びの森というキーワードをたくさん出していただいて、先ほど坂本区長の話も含め

て、森の生態系に個人的に興味がございます。やはりその生き生きしている森と、死にかけている森の話があって、大きな木と、それから中層があって、それから下の草、木との関係性というので、活性化といいますかね、生き生きした森、それから、そんなに力のない森というのは、ある程度色分けされるときに、やっぱりそれと地域づくりの考え方と関連するものってあるのかなあと、薄々思ったりするんですけど、松澤委員はどのように考えますか。

○松澤委員

すいません、青木先生に一番大事なところを質問されて、ありがとうございます。

一番大事なところは、大きな木々を育てるには何が大事かというところ、大地、一番土が大事だと私は思っていて、その土を作るために耕すことが大事ですし、そこに肥料を入れていくことが大事で、それをやっていただく方ってまさに今、板橋区に住んでいて、板橋を支えている一般の方たちだったり商店街の方だったり、そして地域の、高野委員がおっしゃっていたような、民生委員の方だったり、そして町会に従事してやっていただいている方々だったりという思いを、やはり皆さんに伝えていくことが、板橋を本当によくする、最大の肥しと言ったら言い方が悪いのかもしれないですけど、肥料になってそれを吸った子ども達が大きく育っていくんじゃないかなと思うので、青木先生ありがとうございます。

○坂本区長

ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

それでは、次に長沼委員の方からお願いいたします。

○長沼委員

はい。長沼です。よろしく願いいたします。

社会教育の推進においては学校教育との連携・協働が重要ですが、その中でも本日は、部活動支援についてお話をします。というのも「学校部活動の地域移行」についてが喫緊の課題となっているからです。

文部科学省は昨年9月に、令和5年度から「休日の部活動を段階的地域移行する」と発表しました。いずれは平日の部活動の移行も視野に入れていきます。となると、社会教育の出番です。今から準備していかなければなりません。

また、本年6月に経済産業省が発表した部活動改革の提言では、部活動を社会教育として位置付けるよう提案し、さらに産業として成立させるアイデアが出されています。これも注目すべき提言です。

さて、部活動の地域展開は、単に学校の働き方改革だけではなく、生徒目線で考えた時にも大きな意味を持ちます。それは残念ながらさらに少子化が進むため、一つの学校の部の数は、今のままでは立ち行かなくなるからです。生徒にとって、やりたい部がないという事態が頻発

することになり、既に地方の過疎地域の学校では顕在化しています。

そこで、隣の学校と一緒にやる合同部活動の方式や、区内全体で拠点校を定め、例えばサッカーをA中学で、野球はB中学でという形で行う拠点校方式などを地域展開の前に実施し、来るべき地域部活動への準備とするのです。

つまり、これまでの学校部活動の一つの学校ですべての部活動を実施という常識を変えていく必要があります。そして、その先に地域展開がありますが、これらのことは、今から準備を進めておく必要があります。時間がかかるからです。

その際、地域展開ではiCSの関与が重要となります。地域の皆様が、学校、教育委員会と連携して、学校部活動の地域移行、地域展開を主体的に捉えて進める必要があるからです。地域の指導者にとっては、松澤委員のお話にあった「教えることを通して自らも学ぶ」、すなわち生涯学習になり得るのです。可能であれば、いくつかの学校のiCSで先行的に進めてみると良いでしょう。

それよりも前に、まず各学校でもすぐにでもできることとしては、学校部活動の部の数を調整する仕組みを作ること、具体的には減らすルールを学校ごとに決めておくことです。部員数が減ってきてから検討するのでは遅いからです。例えば年に1回、生徒数や各部の部員数を見ながら、必ず検討することをルール化しておくのです。もちろん検討する際は生徒や保護者の意見を加味します。校則と同様、両者の意見も反映させた見直しの仕組みを作ることです。

教育委員会側は、拠点校方式を含め、地域移行をめざして教育委員会が管轄して、板橋区全体でどのような地域部活動を展開するのか、その青写真を描いて推進を図っていくことです。そのためには、指導室、生涯学習課、地域教育力推進課が協働して、例えば、仮称「部活動支援推進チーム」を立ち上げて検討することを提案します。

区役所におかれましては、経済産業省が提案しているように、地域展開した部活動を産業として成立させるために、例えば産業振興課をはじめ、スポーツ振興や文化活動振興の部署が関わって、教育委員会のチームと連携して推進を図っていただきたいです。

ぜひ、区内の企業にとっても、新たな雇用の創出による人材の流入など、区の産業の活性化にも寄与できるよう、協働で進めていただきたいです。

ここで重要なのは、社会教育として展開する以上、企業の視点だけではなく、教育委員会が推進することで教育の視点を担保することです。

私が地域部活動の推進委員会の委員長として関わっている静岡県掛川市では、すでにスポーツ庁と文化庁の両方のモデル地区の指定を受けて、実践モデルの検討を始めています。企業やNPO等の支援も含めて教育委員会がじっくり考えています。

板橋区も「教育のいたばし」を掲げる以上は、都内の他の自治体に先駆けて、部活動の地域展開の先行モデルを作って、部活動支援の新しい形に向けて、早急に検討を始める必要があるのではないのでしょうか。

これまで教員のただ働きに依存してきた学校部活動を地域に移行させる場合、考えておかなければならない課題も多々あります。

例えば、ただ働きの分は、指導者の指導費なのですが、これは受益者負担、すなわち保護者の負担が増えることが想定されます。できる限り負担が増えない仕組みを行政や企業の支援を得て創る必要があります。特に、経済的な要支援家庭への支援は必須です。数値で計測できる学力と保護者の経済状態には相関関係があることは知られていますが、さらに地域部活動へのアクセスでも、格差が広がることは避けなければならないからです。この点についても区長には御理解をお願いします。

前提としては、生徒や保護者、教員、校長、すべての人々に、「部活動は無料で教員がやるもの」という意識を変えることが重要です。60年から70年かけて作り上げてきた仕組みを変えるのは大変なことですが、推進を図る必要があります。

一方、地域展開する際に、部活動にやる気や生きがいを見出している先生方にも配慮する必要があります。具体的には文科省も述べているように、兼業兼職の仕組みを作り、希望すれば勤務時間外に地域部活動の指導者として指導に当たることができるようにすることです。

これにより、教員の異動に左右されない仕組みができ上がり、校長先生も部活動の顧問の依頼で頭を悩ませる必要がなくなります。希望する教員は指導の継続性が担保されますし、生徒は引退なく、地域で好きな活動をずっと続けることができます。つまり、一石二鳥の取組をめざすことができます。

最後に、本日は地域移行という言葉を使いましたが、通常私は地域展開という言葉を使っています。その理由は、移行というと、学校部活動をそのまま地域に移すというイメージがあり、誤解が生じる可能性があるからです。指導者や場所、資金等を考えれば、そのまま移せるはずはなく、新たに創っていくという考え方で推進しないと進まないからです。

地域にでき上がった部活動が、区長のお話にあったように本屋さんのように、居心地の良い、子どもにとっても大人たちにとっても居心地のよい空間になることを願っています。

以上は、部活動の地域展開のエッセンスです。他にも地域指導者の確保の方策、地域クラブへの企業の関わり方、大会・コンクールのあり方などを考えなければならないことが多々ありますが、お時間の関係で省略します。

詳細については、別の機会、例えば板橋アカデミー等でお願いする機会があればお話をします。繰り返しになりますが、地域部活動では社会教育の出番です。大橋館長のお話にあった

「人づくり、関係づくり、地域づくり」をいかに進めるかが鍵になります。

御清聴ありがとうございました。

○坂本区長

ありがとうございました。

長沼委員の御発言に対しまして御意見がございましたら、どうぞお願いいたします。

はい。青木委員、どうぞお願いします。

○青木委員

長沼委員の御意見に私も同感でございます。言われている、先生方の働き方改革の問題を解決する方法としても、今の御提案は非常に重要だというふうに感じました。その中で、ちょっと長沼委員のお話を聞いていて思ったのは、今、高等教育機関なんかでも、いわゆるクロスアポイントメント、企業の中に勤めていても、別の仕事というのを同時にできるというような制度ができています。これは当然ですが、その当人の方にエフォートと呼ばれる、どのぐらい学校で何%の働き、部活動に例えば何%というような寄与率というのをきちっと定義していただいて、それに応じた給料というか、お支払いがあるというようなやり方になっていますが、例えばそういったようなものを、特に部活動がやりたいという先生にとっては、導入することを考えていただければ、やりがいというところにつながっていくかもしれない。もし、そういった制度の導入が、社会的にもどんどん浸透しているところもあるし、教育機関にも入ってきておりますので、その辺の検討が、こういった義務教育の中にも浸透してくれば、もう少し社会が変わってくるかなと思います。いかがでしょうか。

○長沼委員

今御指摘があったように、地域の部活動を展開した場合には指導者の確保というのが、かなり重要なんです。場所の確保とかも重要なんですが、その地域指導者を確保するためには、ボランティア頼みでは、持続可能性がない。となると、お金をまわしていく仕組みをつくる必要があって、これは経済産業省も提言しています。ですからそういう方々にお金を払って、指導費を払って活躍をしていただくことがご本人の学びにもつながりますし、さらに、もっともっと教えてみようということにもなります。地域部活動がさらに進むと、子ども達が今度大人になったときに、じゃあ自分もお世話になったから自分たちのこの地域クラブの指導者になろうという方々が増えてくるということも期待されて、これが板橋区の中で魅力的な生涯学習社会が生まれてくるんじゃないかというふうに考えています。

○坂本区長

ありがとうございました。

私から一点だけ述べさせていただきます。

今の長沼委員の話をちょっと聞きまして少し場面が違うんですけど、例えば今、体育施設は指定管理者にお願いしているんですが、新しくできた小豆沢のスポーツセンターの中で、競泳ができるような本格的なプールになったんですけども、その準備段階で体育協会さんが、やはり運営の方で、資金面、非常に苦勞されているということを聞いておったものですから、何とか体育協会さんが、いわゆるこの地域の総合クラブじゃないんですけども、例えば水泳連盟さんの方は、指導者の立場でいらっしゃいますので、何レーンかお子さんに教える仕組みを、ずっともう、オープン以来作ってまして、昨日オープンした東板橋の方でも同じように、加賀スポーツセンターへと名前を変えましたけれども、そのように地域のやはりプレイヤーの人達が指導者となって講師料というのを少しずつ負担がないところでもらいながら、それを体育協会としてプールして、それでいわゆるこの区域などそういったものに活かしながら、循環させていくということをやっています。多分、学校の方でも同じことが言えると思います。ぜひこればしっかりと研究したいなと思います。

○長沼委員

ぜひ区長さんには、区長部局と教育委員会が連携して進めていただけるようにお願いします。ありがとうございます。

○坂本区長

ほかによろしいですか。それでは先に進めまして、最後になりましたけれども、中川教育長の方から御意見をお願いいたします。

○中川教育長

はい。ありがとうございます。それでは私から御説明いたします。

私は教育長になったときに「教育の板橋」をめざすという中で、特に社会教育、生涯学習に関わるものとして、区民誰もが、いつでもどこでもライフステージに応じて学べるというところでは、いわゆるライフ・ロング、ライフ・ワイド、ライフ・ディープ・ラーニング、人生の長きにわたって学校だけでなく様々なところで量より質を大切にしたい学びを实践できるまちづくりということ掲げてきたわけでございます。

そしてもう一つ、板橋区のめざす、よく教育委員会は「子ども像」というふうに示すんですが、あえて人間像ということで、先ほども示しましたように自立、いわゆる自ら考え、判断し行動する。そして貢献、人のため、社会のためになることを進んです。そして人の話に耳を傾け力を合わせて問題を解決する共生。そして0（ゼロ）から1を創り出すという創造。こういったことが学校教育においても社会教育においてもめざすべき一つのゴールということで、生涯学習社会というものを成立させていきたいなということ。そしてこれも同じように、やはり教育委員会の非常に重要な役割は、生涯学習社会の構築であると。

板橋区の区民の方々が、やはり充実した幸福度の高い人生を送ることができる環境づくりをすることが、教育委員会の役割であり、これは教育委員会だけでは到底できることではなく、まさに区長部局との強いきずな、連携のもとに進めていくものであるというふうに考えています。そこで、生涯学習ということを考えたときに、いわゆる誕生、いわゆる妊娠中も含めて、子ども家庭部や福祉部等との連携の中で、誕生から小学生・中学校あたりまでの様々な学びの機会というのは作り上げてきています。さらに、健康生きがい部の先ほど出ていましたグリーンカレッジも含めて、シニア世代の学びの機会もそれなりに充実してきているのかなという中で、中間層、いわゆる中学校以降からシルバー世代、シニア世代に入るまでの間に教育委員会としての事業のボリューム感っていうものを考えたときに、ん？と考えました。しかしながら先ほど来出ているように、板橋区として考えたときに、区長部局としての様々な事業がここにこうあるということ考えたときに、いわゆるもう一度再構築ということ、今回考えさせていただいたところです。

私は板橋区の社会教育の方向性ということで、やはり目的は、区民の皆様の幸福度或いは充実感が高まっていく。身体的・精神的・社会的に良好な状態にあることが一つの大きな目的であると、人生百歳時代と言われている中で、区民の方々がいわゆる充実して幸福度を感じる、そういったことを目的に考えていくということとなったときに、これまでも、区民文化部、産業経済、健康生きがい、福祉、子ども家庭、資源環境といったですね、それ以外にももちろんすべての区長部局とのつながりを深めていく必要性というのを改めて感じているところでございます。そういう中で、キーワードとして捉えていくのが幸福度、充実感の後に、今までも出ているように、学びの循環という言葉が、これまでも、生涯学習、社会教育という枠組みの中で使ってきたわけですが、この学びの循環とはいったい何なのかというと、一つは人と人との関わりの中で、教わる、教えるというこのスパイラル、先ほどから出ているように、プレイヤーがインストラクターになるとか、或いは、実際に今生涯学習センターの、様々な講座などでは、先ほど高野委員もおっしゃっていただいたように、教えられた方が今度は教える立場になっていく、その方々がまた新たに教えるというようなこういう循環に入っていますし、i - y o u t h の子ども達の様子を見ている、かなりそういった関わりができてきているのかなというふうに思っています。

そしてもう一つ重要なのが、いわゆる個人や地域の様々な課題解決に向けて、問題解決のスパイラル、ここで一つ、これからの課題になってくるのがやっぱり講義形式で、知識をインプットする学びだけでなく、やはり疑問を持って、課題を見つけて考えを発信し、他者とともに考え、新たな考えを創造するといったことも、学びの重要な要素になるんだと。つまり、アウトプットを意識させた、学びということ強く打ち出していく必要があるかなと。そして学び

を一過性のものにせず、その成果を自らの日常生活や仕事に活かしたり、地域の課題解決につなげたり、その中でさらに学びを深めたりする。つまり学びと活動の循環ともいえるのではないかということを思っています。

防災とか、或いは健康、まちづくりなど、地域の身近な問題から、SDGsのような地球規模、或いは世界規模の問題解決への貢献を視野に入れて、つなげていく。幸い板橋区内にはすでに様々なNPO等の取組がなされており、こういった組織とも情報交換などのつながりを持つことを考えていきたいと思っています。

そして、先ほど来出ているように「居場所」というキーワード、これも非常に重要なキーワードというように考えています。私は、板橋区立の幼稚園、小学校、中学校の使命を二つ挙げています。一つは子ども達が安全安心に過ごすことのできる居場所、そして子ども達が自己実現できる確かな学力の定着を図ることができる学び舎と。この子どもというのを区民という言葉に置き換えてみたときに、区民が安全安心に過ごすことのできる居場所、区民が自己実現できる、いわゆる学びを保障できる学び舎づくり、この二つがいわゆる居場所として重要になってくる。つまり福祉的な意味合いの居場所であり、教育的な意味を持つ居場所、こういったものが重要になってくるのではないかと。それからもう一つはコモンズという考え方、これは、いろいろなその居場所も含めてそういう社会教育の施設があるんですが、先ほどこれも私も区長のお言葉を使わせていただくと、今は区が耕した土に、区民の学びの芽の種が芽吹き、育ち、色とりどりの花をつなげながら大きな豊かな森となっていく。その作り手は、当初は行政サイドであっても、やはりそこに参加する人々、参加している人々が、当事者意識を持って自主運営していく。それによって、めざす人間像である、「自立 貢献 共生 創造」というものにもつながっていくと、そういうことを考えております。

そしてもう一つは、これもよく言われる、つながり、関わり、関係性ということで、やはり板橋の区民の方々の孤立化を防ぐ地域コミュニティの活性化、郷土愛の醸成、先ほど松澤委員が言われたように、「いたばしびと」、板橋の区民の人たちが、それぞれ「いたばしびと」であるというような、そんな思いのもとにつながっていく機会を提供していく。昨今、町会自治会の加入率が減少しているという現実と直面したときに、一つやはり学校をプラットフォームにした、いわゆる30代40代の方々の、つながりということを仕掛けていく。これがiCSでもあり親父の会やPTAも関わってくると思うんですが、こういったことも、やはり大事になってくるのかなというふうに思っております。

そして、私なりのゴールイメージとしては、社会教育についてやはり対象者の拡大っていいですか、充実ということで、中高生とシルバーエイジへの間というようなところで考えていったときに、二つのことを考えております。一つは、実はもうこれはもう何度も出ているように、

区としては各部で、区民の方々が主体となって学びに関する事業として様々なコンテンツが充実しているんですが、これらを生涯学習の一環である社会教育としての位置づけを明確にして、区民の方々が一層関わりやすくなるように、或いは区民の皆様が各事業へアクセスしやすいようなシステム、ハブ機能を教育委員会がきちっと推進していく。各部と調整、連携して推進していくと、そういった機能をしっかりと持っていくということが、重要だということ。

それからもう一つ、具体的な話になってしまうんですが、区長と重複しますが教育委員会の内部でもこれも学びの連続性とか、社会教育の充実という視点から、現在、長寿社会推進課が担当されている板橋グリーンカレッジについては、非常に充実した事業であるということから、60歳以上のシニア世代だけでなく、対象世代を広げて、カリキュラムについても現代的社会的課題に広げて、中高生とシルバーエイジの間の世代の学びの場としてはどうかというふうに思っているんですが、それについては、教育委員会事務局も関わらせていただいて、推進していただければなということをお考えいただく機会にさせていただければというふうに思っております。

そして、もう一つ、社会教育施設のあり方、いわゆる居場所としてということで、まず固定観念からの脱却ということ、フレキシブルな発想ということで、具体的に言うと社会教育施設、例えば図書館。図書館は本を借りたり読むところっていうようなところからですね、やはり、人々が集って新たな活動や発想を生み出したり、区民が教養を高めていく、そういう場であるというような、いわゆる発想の広がりを持っていくということが重要で、これは図書館だけでなく、例えば郷土資料館もしかりですし、これまでの生涯学習センター等も、もう少し活動の意味合いを広げていくということが必要になってくるのかなというふうに思っております。それからこれも青木委員から出ているように、エリア構想ということで、幸い中央図書館ができたところは教育科学館もあったり、近隣には、幼稚園小学校中学校といったような施設もある。こういったキャンパス構想じゃないですけど、エリアでの社会教育のあり方といったものを考えていけるかなと思っています。そういう中で、今、やはり、不登校の問題等を考えた時に、もちろん学校に戻ってもらえることが一番だと思うんですが、子どもの居場所としてそういった社会教育施設が新たな価値を持ってくるというところでは、施設の複合化というようなところも必要になってくる。

そしてもう一つ、居場所というのはただ場所だけ設定すればいいのではなく、長沼委員のお話にもあるように、この人材とかスタッフの充実というところでは、社会教育主事、カウンセラー、或いは司書、さらには学芸員、ボランティアの充実というところとともに、NPO組織等の連携というのが一つ大きなポイントになるかと思っております。

実は今、これから進めようとしている一つの取組を御紹介したいんですが、平成28年10月

1日に大原、成増2か所の社会教育会館を生涯学習センターへリニューアルしまして、それまで高齢者、成人を対象とした社会教育だけでなく、i-youthという若者、特に中高生の居場所づくり事業を展開して、今年で5年目を迎えます。当初は公共施設に若者が本当に集まるのかという不安を抱えたスタートでしたが、ダンスや音楽、友人との談話や自習、悩み相談など、令和元年度実績で約年間3万人の若者が家庭、学校以外の第3の居場所として、i-youthを利用するようになりました。そこでi-youthがめざす次の段階としては、利用する約3万人の若者に対して、社会的自立を促していく社会教育として、どのような事業展開を行っていくかが課題となっています。さらに少数ではありますが、難しい厳しい生活や背景、或いは家庭環境によって配慮が必要な利用者も散見され、一人ひとりに応じた適切な支援を行うための専門的な対応も必要となっています。そこで専門的な知見や経験を持つNPO法人と、i-youthに求められる機能の拡充に取り組むこととしました。このたび連携する団体はラーニング・フォー・オールという、子どもの貧困に対する本質的課題を目的に活動しているNPO法人です。当該団体は、子どもの居場所支援事業、子ども支援を行う団体への研修や教材提供事業等を主に行っておりまして、板橋においても、成増フレンドでの不登校支援事業等で連携しているほか、埼玉県戸田市、茨城県つくば市、東京都葛飾区などの自治体での活動実績を持っていらっしゃいます。

これから進めます具体的な活動ですが、大原生涯学習センターのi-youthでは、週2日、居場所支援、相談支援、或いは探求学習、これは地域や社会の課題を子ども自身が見つけて、みずからまたは友達と一緒にその解決を図っていく学習、そして反貧困学習、これは労働基準法や社会保障制度などのトピックを学ぶことを通じて、就労、納税等の国民としての義務を含めて、社会で生きる力の基礎を学ぶことで、困難を抱えた子どもが、自立していくための力を育む、といった活動を行います。ラーニング・フォー・オールのスタッフは、利用者と年齢が近い方が多くいることから、若者のキャリアデザイン、キャリア教育という点でも効果が期待できます。今後もコロナ禍による社会への悪影響が大きいと予想されます。その影響は特に社会的弱者に及ぶことが大きいと言われていることから、i-youthでの若者支援機能を強化していくことは、行政としては意義のある取組であると考えております。今回の連携事業は、令和4年3月31日まで、そしてこの事業経費のすべてが、ラーニング・フォー・オールが働きかけた民間企業から、社会貢献活動CSRとして提供された資金であります。短期間ですが、本事業で効果が見られた場合は、区としても、連携期間終了後も、NPOと連携した若者支援事業を、大原以外のエリアにも展開していき、若者の社会的自立支援に加え、郷土愛醸成と定住化促進に貢献したいと考えております。

最後になりますけれども、いろいろ述べてまいりましたが、人は生涯にわたる学習によって

自己を磨き、その学びを社会に活かすことで、豊かな人生を送ることができると言われてい
ます。生涯学習とは私たちが生涯にわたって行う学習活動です。私たちは生まれるとすぐに、家
庭の中でいろいろ学び始め、やがて学校に通い学習を進め、地域社会でもいろいろな学習機会
に出会い、学びを広げていきます。さらに、学校を卒業して社会に出ると、仕事に関わる学習
や、豊かで充実した日々を送るための学習を続けることとなります。このように家庭教育、学
校教育、社会教育、自主的な学びなど生涯にわたったすべての学習を生涯学習と捉え、教育委
員会では、区長部局や民間の様々な方々とも連携しながら、区民の皆様が豊かな人生を送るた
めにあらゆる機会にあらゆる場所で学習することができ、その成果を発揮できる社会を実現す
べく努めてまいりたいと存じます。

以上でございます。

○坂本区長

どうもありがとうございました。

中川教育長の発言に対しまして、御意見のある方はどうぞお願いいたします。

青木委員、どうぞお願いいたします。

○青木委員

恐れ入ります。

非常に仔細に富んだ発表で、いろいろ思うところがあったんですけども、ネットワーク、
コネクション、リレーションという中で、区民の孤立化を防ぐという話がありました。

地域コミュニティの活性化や郷土愛の醸成っていう中で、そのあとの御提案の中でいろいろ
板橋は本当に行っていると思ったんですけども、一方、地域、地方や町で、いわゆるお祭り
すとか伝統の行事というのをその都度やって、そのたびに、そういう時期だからっていつて、
他の地域から戻ってきたりというような、いわゆる郷土愛の醸成につながるような取組があつ
たと思うんですけども、板橋も例えば、私だったら南常盤台にあるときわ台天祖神社でのお祭
りがあって、結構その時期には人が集まったりするというようなことが、この辺の一つ地域コ
ミュニティの活性化や郷土愛という醸成に同時につなげていくようなことは、動きとしてどう
なってるのか、衰退をしているのかっていうのはちょっと私も分からないところなんで、教育
長がいいのか高野委員に聞いた方がいいのか、松澤委員に聞いた方がいいのか分かりませんけ
ど、その辺の動きってどうなってるのかって、もし分かれば教えていただきたい。

○中川教育長

まさにおっしゃっていることはとても大事で、逆に今コロナ禍でそういったものがなくなつ
てることによるデメリットといいますけど、そういったものがあると思います。松澤委員、まさ
に地元でどうなんでしょうか。

○松澤委員

やはり若者のお祭りへの参加は地域格差があると思いますので、若者たちが中心となって盛り上げている地域は、どんどん人が増えていますし、ちょっと言いづらいですけども、高齢化が進んでいる地域は、減少しているように見られますので、今は青木先生がおっしゃったところで、私も一言ちょっと付け加えさせていただくと、教育長がおっしゃっていた中でやはり、学び合いとか、教え合いというんですかね、教えていただく、教えてもらった方が、教える側にも回るっていう考え方もいいんですが、今のこの時代転換の時に若い人から年配の方が教えていただくことも多いし、子ども達から私たち世代に教えていただくことも多いので、それを全部、全員でともに学び合ってともに教え合っていくっていうことが、先ほどの青木先生の質問にも共通するんですが、そういうふうにみんなで考え、みんなで作り上げていく地域は、人が伸びているのではないかなと感じました。

○坂本区長

ありがとうございます。

○青木委員

ありがとうございます。

○坂本区長

それでは、中川教育長の御意見の方も御質問も終わりました。ありがとうございました。

全員の方から、大変貴重な御意見をいただきまして、長時間にわたりまして大変熱のこもったとても有意義な意見交換ができたと思っております。皆様と今日、共有いたしました課題につきましても、板橋区全体の問題として、どのような施策が展開ができるのか、これをよく考えていきたいと思っておりますし、今日はいろんな部長、幹部職員がおるものですから、SDGsの視点も含めて、この問題については、非常にこのいい題材がそろったんじゃないかと思っておりますので、ぜひそういった施策の展開に結びつくように、お願いしたいと思っております。

今後とも区長部局と教育委員会がより綿密に連携・協働して、区民一人ひとりの可能性を拓ける学習の場と機会が提供できるように、できることからすぐにでも取組を進めていきたいと考えております。

教育委員の皆さんにおかれましても、より一層の御理解、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

今日はコロナ禍ということで、不自由がある中集まっていたいただきまして、本当にありがとうございました。

これをもちまして、令和3年度板橋区総合教育会議を閉会といたします。

皆様ありがとうございました。

